現代の男女大学生の性格特性と性役割認知

児玉真樹子・杉本明子・松田文子

Masculinity and femininity in male and female undergraduates

Makiko Kodama, Akiko Sugimoto, and Fumiko Matsuda

1990年代に入ってからの女子青年の変貌は著しく，現代の男子，女子それぞれの持つ性格特性が旧来男性性，女性性と呼ばれてきたものとずれている可能性がある．また性役割に関する社会の期待の認知も変化しているように思われる．そのため，現代の大学生の持つ性格特性および性役割認知を調査する．

調査Ⅰでは現代の大学生の持つ性格特性を調べた．その結果，男性性，女性性いずれにおいても男女間で有意差はほとんど見られなかった．母親の就労タイプ別にみると，乳幼児と児童期に母親がフルタイムで働いていた場合，そうでない場合より，男子において思いやりのある人間として自己評価する傾向が高まることが判明した．

調査Ⅱでは自己にとっての重要性の認知と社会からの期待の認知について調べた．その結果，女性性および人間性に関して，女子が男子より自己にとって重要と評価する傾向が見られた．一方，社会からの期待は男女間で差はほとんど見られなかった．また，これらの特性に関して，女子の方が男子より，社会からの期待以上に自己にとって重要と認知する傾向がみられた．

以上より，女性性，男性性という呼び名が，現代においてふさわしくないことが示された．

キーワード：男性性，女性性，自己にとっての重要性の認知，社会からの期待の認知

問題

わが国の1960年代から80年代の青年期男女を対象とした，性役割認知や性役割観に関する研究では，男性には活動性や知性，女性にはかわいらしさや従順さがそれぞれ期待されていることが明らかにされ（たとえば，伊藤，1978；柏木，1967，1972），それらの性格特性は男性性（Masculinity），女性性（Femininity）と呼ばれてきた．そして，男子青年も女子青年も，女性性より男性性の方が自己にとっても社会にとってもより重要と考えており，したがって，女子青年は，自己への期待と社会からの期待の不一致にさらされやすく，性役割葛藤が大きい，と言われている（たとえば，伊藤・秋津，1983；柏木，1974）．

しかし，一般的印象として 1990 年代に入ってからの女子青年の変貌は著しく，女子は活発で積極的に，一方，男子はおとなしくやさしくなっているように見受けられる．女子高校生の性交率の男子をしのぐ増加や，非行少年に占める女子の割合の急増といった，目に見える形での男女差の縮小もある（松田・中塚，2002）．今や女性性，男性性といった命名そのものが時代に合わなくなっている可能性がある．このことはまた，母親の就労形態とかなり関係しているかもしれない．なぜなら社会における男女の働きの差を子供時代に身近に感じさせる窓の役割を，母親の就労が果たしている可能性があるからである．

また社会の期待の認知にしても，とくに四年制大学の女子が，いわゆる女性性を社会から期待されていると，70 年代，80 年代のころのように感じているとは思えない．しかし他方で，社会にはあいかわらず根強く性差別は存在しており，大学生はそれまでの学校生活を含めて，それを直接経験することは少なかったかもしれないが，大学教職員の地位別の男女比，家庭における父母の家事労働割合，父母が両方働いている場合の賃金差等，間接的には多くの性差別を垣間見ているはずである．そのような社会の中で，現代の女子大学生は社会の期待をどのように感じ，自分自身にどのような性格特性を求めているのだろうか．

本研究では，調査 I で，まず男子大学生と女子大学生が，男性性，女性性といわれてきたような性格特性を，自分がどの程度持っていると認識しているかを調べる．これにより，そもそも男性性，女性性という言葉が現代にも合ったものであるかどうかが明らかになるだろう．また母親の就労形態により自分の性格特性の認知が異なるか否かも調べる．調査 II では，男性性，女性性と呼ばれる性格特性，及び近年ますますその重要性を指摘されている男女共通の人間性特性（遠藤・橋本，1998；伊藤・秋津，1983）について，自己にとっての重要性と社会からの期待の認知を調べ，それぞれの項目および両者間のずれ，すなわち性役割葛藤に関する男女差について検討する．

以上 2 つの研究を通して，現代の大学生男子と女子の性格特性と性役割認知の一端を示したい．

調査 I

方法

調査参加者　四年制総合大学の教育学部に在籍する 1～3 年生 164 人が調査に参加した．欠損値のない 157 人（男子 67 人，女子 90 人）のデータを以下の分析で使用した．

質問紙　男性性，女性性の測定には，Spence and Helmreich（1978）の個人的属性質問表（The Personal Attributes Questionnaire）を用いた（訳は，東・小倉，1984，に基づく）．この質問表は，図 1 のような性を弁別する特性であるとステレオタイプに信じられている 24 の 2 極性項目から構成されている．8 項目ずつ 3 下位尺度にわかれており，男性性尺度は，男女ともに社会的に望ましい特性であるが，男性がより強く有している特性を測定するものであり，女性性尺度は，男女ともに社会的に望ましい特性であるが女性が男性より高い程度に有していると信じられている特性を測定するものであり，男－女性性尺度は，社会的望ましさの極が男女で逆の特性（図 1 では右の極が男性に望まれ，左の極が女性に望まれる）を測定するものである（実際の質問紙では 3 下位尺

度の項目はランダムに混ぜてある）．質問においては，自分にどれだけあてはまるかを 5 段階評価させた．

また母親の就労形態を，乳幼児期，児童期，中学生以降にわけて，(a)フルタイム（1 日 8 時間以上）でずっと就業していた，(b) ずっとフルタイムでというわけではないが、就業していたときがある，(c)まったく就業していなかった，の 3 形態から選ばせた．

手続　授業時間中に一斉に実施・回収，あるいは個別に調査用紙を渡して個別に回収するという方法で，1999 年 5 月に実施した．調査は無記名であった．

結果と考察

男性性，女性性，男－女性性の獲得の評定値の平均値を男女別に示すと図 1 のようになる．5% 有意水準の t 検定（$df = 155$）で男女差を調べた結果も記入してある．これをみると，男性性特性については男女間にまったく差がなく，女性性特性については，「非常に人の気持に心を配る」がむしろ男子で高く，「他人との関係において非常に暖かい」は女子の方が高い．男－女性性特性では，「全く積極的でない－非常に積極的である」，「すぐ泣く－決して泣かない」において，有意な男女差が見られ，前者は女子の方が，後者は男子の方が男性的とされる方向への得点が高い．

平均評定値が 1 以上と高いのは，男子の「全く人の気持に心を配らない（－2）－非常に人の気持に心を配る（2）」（1.15）であり，女子でも 0.80 と低くはない．また平均評定値が－1 以下と低いのは，女子の「自分のやったことを他人に認めてもらうことを非常に必要とする（－2）－自分のやったことを他人に認めてもらうことに無関心である（2）」と男女ともの「非常に傷つきやすい（－2）－全く傷つかない（2）」の 2 項目である．なお前者に関しては男子でも－0.96 と低い値である．

以上のような結果は，現代の大学生男女の特徴を端的に示している．すなわち，女子の方が男子よりも積極的であると自己評価しており，男子は女子より他人に気配りしていると自己評価している．もちろん男子と女子で自己評価の基準が異なる可能性は否定できないが，旧来のステレオタイプな性差と一致するのは，女子のほうが男子より他人との関係において暖かく，すぐ泣きやすいことのみで，女性性，男性性という呼び名が，現代においてふさわしくないことを示唆している．また，男女ともに，他者への気配りをして，自分のことを他人に認めてもらいたがり，傷つきやすいと自己評価しており，他者に囲まれた集団の中で神経をピリピリさせている様子がうかがえ，松田（2002）の述べている現代の青少年の特徴を数値的に非常によく表している．

次に母親の就労形態と大学生の性格特性との関係を分析する．まず性格特性をいくつかにまとめるために因子分析を行なった．男性性，女性性等の特性分類がそのまま使用できないことが上記の分析から明らかになったためである．主因子法（プロマックス回転）による因子分析の結果，3 因子が抽出された．6 項目は，因子負荷量が.40 以下ないしは複数因子で.40 以上であったので除き，再度因子分析を行なった結果が表 1 である．3 つの因子は順に「思いやり因子」「積極性因子」「自立性因子」と名づけられるようなものであった．母親の就労形態を乳幼児期・児童期ともにフルタイムの就労をしていた「継続フルタイム型」，その間ずっと就労していなかった「継続非就労型」，

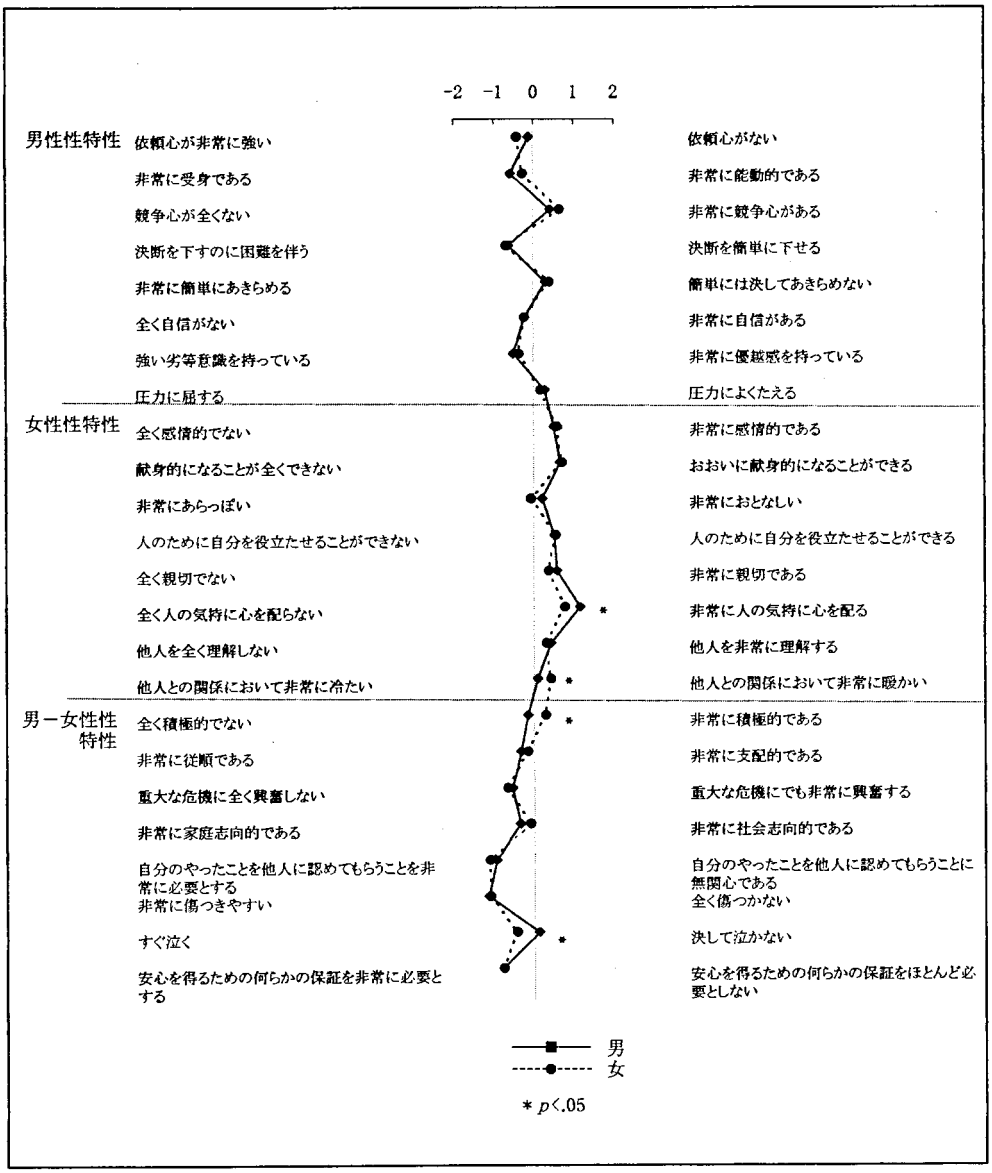

図1 男女別に見た男性性特性、女性性特性、男－女性性特性の自己評価の平均値（調査Ⅰ）

それ以外の「その他」に3分類し，男女別に，3因子得点の平均値（*SD*）を示したのが表2である．性格の因子毎に，就労形態（3）×性（2）の2要因の分散分析を行なったところ，積極性因子と自立性因子においては有意な主効果も交互作用もみられなかったが，思いやり因子では交互作用が有意であった（$F(2,151)=4.04$, $p<.05$）．単純主効果の検定とRyan法による多重比較の結果，継続フルタイム型では男子の得点が女子より高く，また男子においてのみ，継続フルタイム型の得点が他の2つの型の得点より高かった．すなわち，乳幼児と児童期に母親がフルタイムで働いていた場合，そうでない場合より，気配りのある思いやりのある人間として自己評価する男子大学生が育っているということである．思いやり因子に含まれる項目は，元の尺度では全て女性性特性に属していたものであり，従って子どもの出産にもかかわらず母親がフルタイムで働きつづけることが，男子に好ましい女性性特性を身に付けさせることを示唆している．

表1　性格特性の因子分析結果（調査Ⅰ）

項目		因子1 思いやり	因子2 積極性	因子3 自立性
非常に人の気持に心を配る	(女)	.71	-.14	-.12
他人を非常に理解する	(女)	.70	-.17	.15
人のために自分を役立たせることができる	(女)	.69	.10	.00
非常に親切である	(女)	.68	.00	.14
他人との関係において非常に暖かい	(女)	.57	.04	-.28
おおいに献身的になることができる	(女)	.53	-.08	-.06
非常に積極的である	(男女)	.29	.71	.02
非常に能動的である	(男)	.25	.69	.19
非常に社会志向的である	(男女)	-.18	.55	-.08
非常に競争心がある	(男)	.01	.53	-.13
非常に支配的である	(男女)	-.25	.48	.04
非常におとなしい	(女)	.29	-.62	.07
重大な危機にでも全く興奮しない	(男女)	-.15	-.22	.69
安心を得るための何らかの保証をほとんど必要としない	(男女)	-.26	.03	.61
全く傷つかない	(男女)	-.09	.25	.55
自分のやったことを他人に認めてもらうことに無関心である	(男女)	.06	-.20	.53
非常に優越感を持っている	(男)	.15	.20	.52
圧力によくたえる	(男)	.27	-.04	.50
累積因子寄与率(%)		16.57	29.56	41.07

注．(男)は元の尺度で男性性特性，(女)は女性性特性，(男女)は男ー女性性特性．

表2　就労形態別にみた男女の性格特性平均得点（*SD*）（調査Ⅰ）

就労形態	性	*n*	因子1 思いやり	因子2 積極性	因子3 自立性
継続フルタイム	男	17	0.91 (0.55)	-0.14 (0.54)	-0.53 (0.49)
	女	16	0.42 (0.61)	-0.17 (0.48)	-0.95 (0.63)
継続非就労	男	18	0.45 (0.44)	-0.31 (0.41)	-0.58 (0.47)
	女	26	0.60 (0.57)	0.01 (0.45)	-0.56 (0.45)
その他	男	32	0.44 (0.64)	-0.03 (0.47)	-0.68 (0.56)
	女	48	0.49 (0.54)	0.14 (0.48)	-0.60 (0.52)

注．得点範囲は-2～2．

調査Ⅱ

方法

調査参加者　調査Ⅰと同じ大学の同じ学部の異なる年次の3年生153人が調査に参加した．欠損値のない130人（男子42人，女子88人）のデータを以下の分析で使用した．

質問紙　調査Ⅰの質問紙は，日本の男子，女子を対象にして尺度構成したものでないので，その影響が調査Ⅰにあらわれたのかもしれない．そこで調査Ⅱでは男性性，女性性の測定に伊藤（1978）を使用した．性格特性は図2のように，男性性，人間性，女性性各10項目で，評定は5段階である．質問紙ではまず，「一般に，世間の人々があなたに対してどれくらい望んでいると思うか」を全項目についてたずねた後，「自分にとってどの程度重要か」を全項目について問うた．前者の質問は社会からの期待の認知であるが，この質問文の中には，従来の研究（例えば，伊藤，1978；伊藤・秋津，1983；柏木，1967）では含まれることの多かった「男」「女」の表現は含まれていない．これは「男（女）としてのあなたに対して世間が期待する･･･」というような質問文にした場合，ジェンダー・ステレオタイプ（伊藤，2001）をわざわざ喚起し，その方向に認知をゆがめてしまう恐れがあるからである．本調査は，男子あるいは女子大学生が，社会が自分に対して何を期待しているかを考えるときでさえ，ジェンダー・ステレオタイプを反映させるのかどうか，を調べるものだからである．

手続き　2000年10月の授業時間中に一斉に行なった．

結果と考察

自己にとっての重要性の平均評定値を男女別に示したのが図2である．高得点ほど自分にとって重要であることを示している．性差についての t 検定（$df = 128$）の結果も示してある．これをみると男性性特性では「大胆な」のみが有意で，男子の方が女子より高い．女性性特性では，男女ともに評定値が低いが，半数の5項目で，女子が男子より有意に重要だとしている．女子は人間性特性においても半数の5項目で男子より有意に重要だとしている．

社会からの期待の認知を同様に示したのが図3である．女性性特性で男女ともに低いが，男女差は小さい．その他の下位尺度でも男女差は小さく，各下位尺度に1項目ずつ有意な項目があるのみである．

自己にとっての重要性の認知と社会からの期待の認知のずれは表3のとおりである．ずれの男女差の t 検定（$df = 128$）の結果も表3に記入してある．有意な項目はすべて，女子の方がプラスの方向へのずれが大きいことを示している．すなわち社会は自分にそこまで期待していないのだろうが，自分はもっと重要だと思っている，というものである．その内容は，男性性特性1つ，女性性特性3つ，人間性特性3つである．

以上より女子は，男性性特性は男子並に，人間性特性は男子以上に重要視しており，さらに女性性特性においてすら，社会が自分に期待していると思っている以上に，優雅で，繊細で，おしゃれなことは自分にとって重要だと思っている．これについて社会における性差別と照らし合わせて考

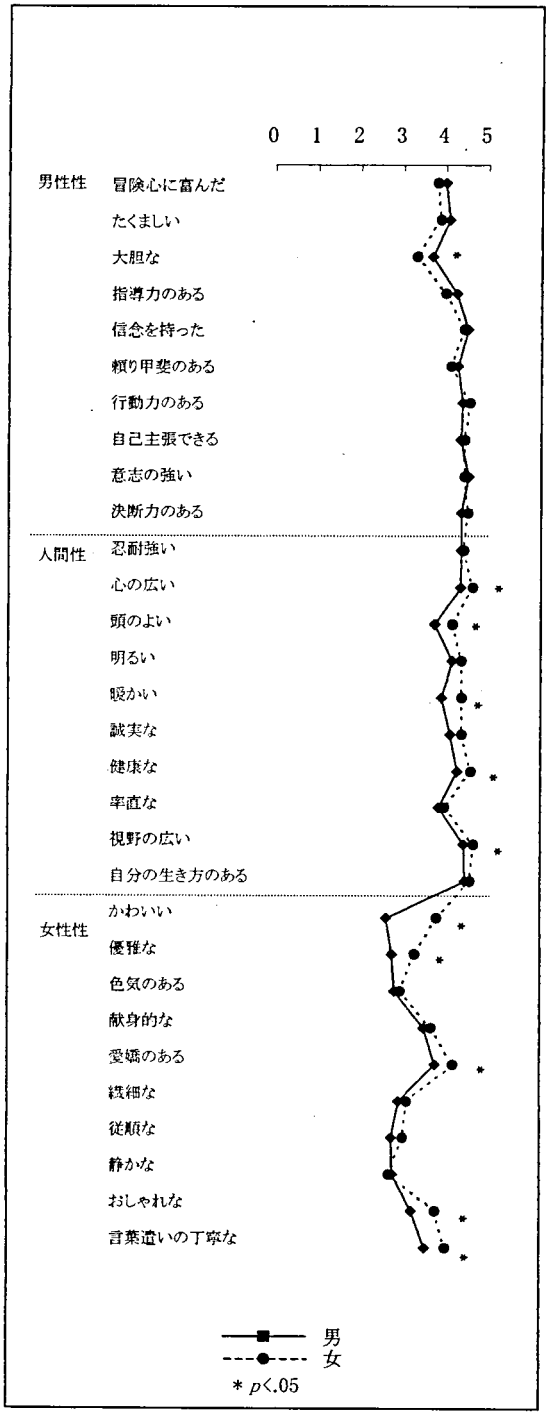

図2 男女別に見た男性性特性、女性性特性、人間性特性の自己にとっての重要性の平均値(調査Ⅱ)

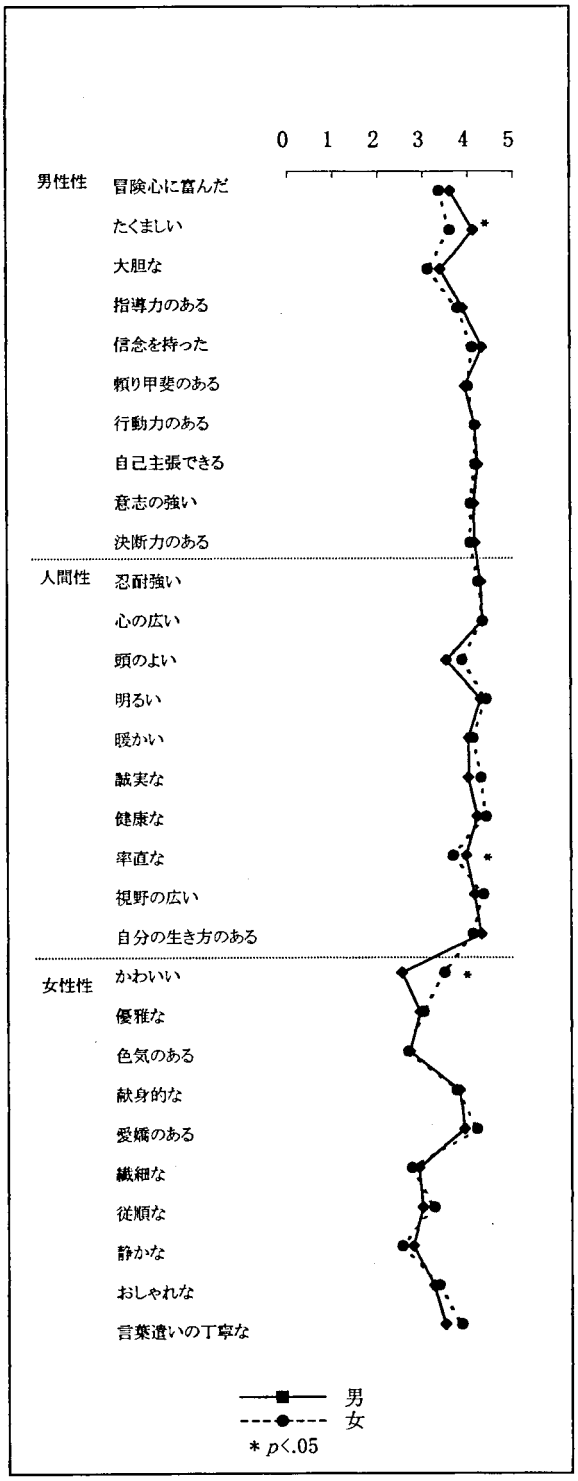

図3 男女別に見た男性性特性、女性性特性、人間性特性の社会からの期待の認知の平均値（調査Ⅱ）

えると，女子大学生は，社会から求められる以上に良い特性を持たないと現在の男性優位な社会では男性と対等な立場にたつことはできないと感じているのかもしれない．また女性性特性のうち美しさに関しては，女性の武器としての利用価値を評価しているのかもしれない．

また，伊藤・秋津（1983）は，女子は男性役割，女性役割両方を自己の価値規範として受け入れられるとしているが，本調査の女子にもその傾向がある．しかし柏木（1974）と同様，女子のみ自己の希望と社会の期待のずれが大学生で大きくなるとしている点については，たしかにその傾向が本研究でもみられるが，そのずれの方向はかならずしも同じではない．特に女性性に関しては逆の傾向である．

表３　自分にとっての重要性評定値から社会からの期待の認知の評定値を引いた差の平均値（*SD*）と男女差の *t* 検定の結果（調査Ⅱ）

	項目	男		女
男性性	冒険心に富んだ	0.40 (0.91)		0.44 (0.96)
	たくましい	-0.02 (0.72)	<	0.28 (0.99)
	大胆な	0.31 (0.81)		0.22 (0.92)
	指導力のある	0.38 (0.82)		0.24 (0.97)
	信念を持った	0.21 (0.84)		0.36 (0.87)
	頼り甲斐のある	0.36 (0.79)		0.15 (0.74)
	行動力のある	0.26 (0.80)		0.43 (0.71)
	自己主張できる	0.14 (0.68)		0.31 (0.73)
	意志の強い	0.43 (0.86)		0.41 (0.72)
	決断力のある	0.24 (0.91)		0.49 (0.74)
人間性	忍耐強い	0.12 (0.77)		0.23 (0.77)
	心の広い	0.05 (0.94)		0.33 (0.71)
	頭のよい	0.26 (1.06)		0.34 (0.88)
	明るい	-0.10 (0.73)		0.01 (0.62)
	暖かい	-0.05 (0.91)	<	0.31 (0.72)
	誠実な	0.14 (0.81)		0.13 (0.76)
	健康な	0.10 (0.69)		0.23 (0.75)
	率直な	-0.07 (0.68)	<	0.36 (0.75)
	視野の広い	0.33 (0.75)		0.39 (0.67)
	自分の生き方のある	0.21 (0.68)	<	0.52 (0.69)
女性性	かわいい	0.12 (1.04)		0.34 (0.90)
	優雅な	-0.14 (1.03)	<	0.33 (0.93)
	色気のある	0.16 (0.17)		0.33 (0.87)
	献身的な	-0.24 (0.76)		0.00 (0.86)
	愛嬌のある	-0.10 (0.91)		0.06 (0.72)
	繊細な	0.07 (0.78)	<	0.41 (0.81)
	従順な	-0.19 (0.86)		-0.16 (0.95)
	静かな	0.05 (0.79)		0.22 (0.88)
	おしゃれな	0.05 (0.91)	<	0.50 (0.87)
	言葉遣いの丁寧な	0.10 (0.98)		0.20 (0.83)

注．<は不等号の方向に男女差が有意（*t* 検定，$p<.05$）．

総合考察

調査Ⅰの結果は，伝統的な男性性，女性性についての考えを否定するものであった．すなわち，男性性特性を自分がどの程度有しているかについて男女差はなく，女性性特性については，「非常に人の気持に心を配る」がむしろ男子で高く，また男子にとって高い方が望ましいが女子にとっては逆であるとされる「非常に積極的である」という特性も女子の方が，自分がより高く獲得していると評価していた．伝統的性役割観と一致したのは，「他人との関係において非常に暖かい」「すぐ泣く」において女子の方が高かった点のみであった．遠藤・橋本（1998）は，Bem（1974）の性役割尺度の日本語版を用いて，男性性の獲得に関して大学生男女に有意差がないことから，青年層において男性性獲得の男女差が小さくなっている可能性を示唆した．遠藤・橋本では女性性に関しては依然女子の方が男子より高かったが，本研究では，女性性獲得に関しても男女に差がなくなっていることを示している．このような結果は，女性性，男性性という呼び名が，現代においてもはやふさわしくないものになっていることを示唆する．

さらにこの調査Ⅰは，母親が乳児・幼児・児童期を通してずっとフルタイムで仕事を続けることが，男子大学生の，他人への思いやりや暖かさといった伝統的には女性性特性に属する特性を高めることを示した．心理的両性具有性の人は，社会的適応にも優れ，また心理的な健康度が高いことが，これまでいくつかの研究で示唆されているが（例えば，Bem，1975；土肥，1996；遠藤・橋本，1998），そのことからすると，これら男子大学生はより好ましい特性を身につけ，より心理的に健康である可能性がある．おそらく，働く母親をいたわることが契機となったと思われる．このような特性の獲得は，しかし女子大学生の場合にはみられなかった．父親と同じようにフルタイムで働く母親が，それにもかかわらず家事労働のほとんどを負っているという現実を見ることは（厚生省，1998），異性である男子にはいたわりの念を引き起こしても，同性である女子には反撥を呼ぶ面もあるのかもしれない．また現代においても男子より女子のほうが家事の手伝いをさせられることが多いという現実は（総務庁青少年対策本部，1992），母親がフルタイムで仕事をすれば，女子には当然のように家事手伝いが期待されることも多いだろうと予想され，それも母親への反撥を呼んだかもしれない．このような家庭内の男女差別的なあり方が，男子大学生と女子大学生の違いを生んだ可能性は否定しきれないが，今のところ推測にすぎない．今後の課題としておく．

調査Ⅱの結果も，性役割意識に関する1960年代から80年代にかけての結果と相容れない部分が多い．柏木（1967，1972，1974），伊藤（1978），伊藤・秋津（1983）によれば，女子は女性として期待される以上に自分にとって男性役割が重要と思っており，社会から期待されているものより低い価値しか女性役割に見出していない．そのため女子大学生は男子大学生と異なり，自分の抱く性役割観と社会一般の期待との大きなずれを認知し，強い葛藤にさらされるとしている．本研究では，女性役割，男性役割と言うことをあからさまに出さずに質問してはいるが，女子も男子も社会からの期待の認知に関してほとんど差はない．たしかに自分が自分に抱く重要性の認識と社会の期待の認識のずれは女子で大きいが，そのずれは伊藤・秋津（1983）とは異なり，男性性特性ではほとんどみられない．ずれは女子の方が男子より人間性特性を社会が期待する以上に自分にとって重

要とみなすことと，さらに驚くべきことに，女性性特性についてさえ，社会が期待する以上に自分にとって重要としていることにある．しかもその女性性特性の内容を見ると，「色気がある」「従順な」「静かな」といった経済的自立や社会的活動に重要とは思えない特性については女子も（もちろん男子も）重視せず，「かわいい」「優雅な」「愛嬌のある」「おしゃれな」「繊細な」「言葉遣いの丁寧な」といった，女子の社会的活動に有利になりそうな特性を男子以上に，あるいは社会の期待以上に重視しているのである．このことは日本人の性役割態度が単に平等主義的方向へ変化している（東・鈴木，1991）と単純には言えないことを示している．遠藤・橋本（1998）は，精神的健康度の観点からみた自己実現度が女子の方が男子より高く，女子の方がより能動的，積極的に生きる姿勢が強いように思われると，調査結果に基づいて述べているが，本研究の結果も，それと矛盾しない．東・小倉（1984）は，女性が女性の役割を演じている限りは社会的に非難されることはないが，役割そのものが屈辱的であると述べているが，伊藤（2001）も指摘するように，伝統的性役割観について，時代は確実に変わっているといえるだろう．

さて，宇井・松井・福富（2001）は，日本の青年女子の性役割態度の変化過程には2つあると予測している．1つは性差別の経験を契機とする過程であり，もう1つは就労などの社会的活動に関する自立への関心を持つことを契機とする過程である．本研究にみられたような，性役割態度に関する平等主義的あるいはそれ以上に貪欲な女子大学生の意識は，就職活動や就職後に経験する性差別でどのように変わっていくのだろうか，あるいは社会をどのように変える力となるのであろうか．残された興味深い課題である．

引用文献

東 清和・小倉千加子 1984 性役割の心理 大日本図書

東 清和・鈴木淳子 1991 性役割態度研究の展望 心理学研究，62，270-276.

Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.

Bem, S. L. 1975 Sex role adaptability: One consequence of psychological androgyny. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 634-643.

土肥伊都子 1996 ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 教育心理学研究，44，187-194.

遠藤久美・橋本 宰 1998 性役割同一性が青年期の自己実現に及ぼす影響について 教育心理学研究，46，86-94.

伊藤裕子 1978 性役割の評価に関する研究 教育心理学研究，26，1-11.

伊藤裕子 2001 性差覚醒状況におけるジェンダー・ステレオタイプ 心理学研究，72，443-449.

伊藤裕子・秋津慶子 1983 青年期における性役割観および性役割期待の認知 教育心理学研究，31，45-50.

柏木恵子 1967 青年期における性役割の認知 教育心理学研究，15，193-202.

柏木恵子 1972 青年期における性役割の認知II 教育心理学研究，20，48-58.

柏木恵子 1974 青年期における性役割の認知(Ⅲ)－女子学生青年を中心として－ 教育心理学研究, 22, 205-215.

厚生省 1998 平成10年版厚生白書 ぎょうせい

松田文子 2002 子どもをとりまく現代社会 松田文子・高橋 超（編著） 生きる力が育つ生徒指導と進路指導 北大路書房

松田文子・中塚勝俊 2002 子どもの反社会的行動 松田文子・高橋 超（編著） 生きる力が育つ生徒指導と進路指導 北大路書房

総務庁青少年対策本部（編） 1992 中学生の母親 大蔵省印刷局

Spence, J. T., & Helmreich, R. L. 1978 *Masculinity & femininity: Their psychological dimensions, correlates, & antecedents.* London: University of Texas Press.

宇井美代子・松井 豊・福富 凌 2001 女子高校生における性役割態度の変化過程 心理学研究, 72, 95-103.